



Interview

仕事人インタビュー

落ち着いて、
周りを
見渡すことで
必ず道は開けます

富川悠太さん
テレビ朝日アナウンサー



—テレビ局での仕事を指したきっかけは？

スポーツに携わる仕事をしたいという思いがずっとあり、スポーツキャスターを目指していたんです。就職活動ではテレビ局のアナウンサー職を受けました。面接でも、志望はスポーツだとアピールしました。むしろ報道には苦手意識があり、できれば行きたくなくなつたのです(笑)。

—仕事を始めてから現在までの間、仕事への意識は

どう変化しましたか？

はじめはスポーツ実況を担当していたのですが、徐々に情報系やバラエティの仕事が増え、入社5年目、報道ステーションが始まる時からフィールドキャスター(リポーター)を務めることになりました。スタートして半年ほどは、手探りで、「ちゃんと伝わっているのかな」と不安になることもありました。そんな中、新潟中越地震が起こり、取材に向かいま

した。「とにかく何かしたい」と、空き時間に片付けなどを手伝ったんです。そうしたら、被災者の方が取材時には聞けなかったことを色々と話してくれて。中継が終わると、「こっちで一緒に飲もう」と「仲間」のように接して下さいました。

スポーツ取材で、選手たちと時間を共にする中で信頼関係を築けたことを思い出し、「これが自分の取材スタイルなんだ。スポーツも報道も根幹は同じだ」と気がきました。それ以降、現場の生の声

現場に近い存在であろうと意識しています。そうすることで、少しでも現場目線、視聴者目線で情報を届けられればと思っています。

—これまでに経験した仕事のピンチをどう切り抜けたか、聞かせてください。

ピンチはたくさんありましたが、特に印象に残っているのは、ある事件現場からの中継です。スタジオの古館さんとながっているはずが、突然、イヤホンから「ぎゃはは」という笑い声が聞こえ、スタジオからの声がほとんど聞き取れなくなつたんです。

「大ピンチ」と一瞬、頭が真っ白になりましたが、身体の角度を少し変えてみたら、スタジオとつながり、途切れ途切れの音声を頼りになんとか中継を乗り切ることができました。他局のバラエティ番組と混線してしまっていたんですね。取材や中継を重ねてきたおかげで、ピンチに立っている自分を歩引いて見ることができ、「いつも通りにすれば大丈夫」と、固まってしまうので済んだのだと思います。

失敗を恐れず どんどんチャレンジを してもらいたいです

—取材のリサーチ、番組での発言の準備はいつ、どのようにしていますか？

基本的に、寝ている時以外はすべてリサーチ、準備の時間だと思って過ごしています。夢も仕事の夢しか見ないんですよ(笑)。

どんなニュースを取り上げるか常にアンテナを張っているか、街の人は何を思っているか、できる限り話を聞くようにしています。ニュースのラインナップを決める打ち合わせが夕方にあるので、それまでが勝負です。

例えば、豊洲の問題を取り上げようと思ったら、出社前にちょっと豊洲に寄って、街の人に話を聞いてみたりしています。



富川悠太(とみかわ ゆうた)
1976年生まれ。横浜国立大学教育学部を卒業後、99年テレビ朝日に入社。報道番組などのリポーターとして、毎日発生するニュースの現場を飛び回り、現地から生の情報を伝えてきた。2016年4月、『報道ステーション』のメインキャスターに就任。

20代の頃は、うまく話せるようになりたい、アナウンサーとして勝ち上がりたなど、自分本位の考え方をしていました。でも、現場に何度も足を運ぶうちに、取材相手やスタッフ、本当に多くの人に支えられて自分はテレビで伝えられるのだと気がきました。

キャスターは「ニュースの顔」と言われますが、報道はチーム戦です。番組関係者をまとめる「キャプテン」のような存在になり、チーム力で勝負していけたらと思っています。

—読者の若者たちへメッセージをお願いします。

